琉球大学学術リポジトリ

選択制、男女共習、選択制、男女共習、たて割り学習に対する中学生の意識に関する研究

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践研究指導センター
	公開日: 2008-11-18
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 小橋川, 久光, 玉城, 昭子, 上原, 廣子, Kobashigawa, Hisamitsu, Tamaki, Akiko
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/7967

選択制、男女共習、たて割り学習に対する中学生の意識に関する研究

小橋川　久　光*　玉　城　昭　子*　上　原　廣　子**

（1993年6月30日受理）

本研究は、中学生を対象にし、体育における選択制、男女共習、たて割り学習を実施することに対する反応を調査し、性別、学年別の意識の違いを明らかにしようとするものである。特に今回の目的は、体育における体操を除く6領域に対する反応の違いを明らかにすることにある。この結果は、選択制、男女共習、たて割り学習を実施する上での基礎資料を提供することになろう。

はじめに

平成元年に改訂された中学校体育の学習指導要領では、個性を生かす教育の充実と生涯・体育スポーツの観点を重視して、個人差に応じた指導の充実を図ることを目的に、選択制や男女共習が導入された。

このような指導要領の改訂を基にして、琉球大学教育学部附属中学校では、1989年度より、男女合同の3学年たて割りの学習形態を導入した球技の選択制の授業や運動の特性、生徒の発育、発達やレディネスを考え、学年単独での男女共習による選択制、2・3年生たて割りの男女共習による選択制など、多様な学習形態を導入している。男女共習の基本的考え方は、男女差をあくまでも「個人差」に帰結するものとして捉え、男女の特性を理解し、スポーツを男女で共有できる文化として学習させる有効な方法であるとしている。また3学年が合同した学習集団は異年齢で組織するため、学年間の友好関係をつくり、異学年でのスポーツの楽しみ方を学習させるのに有効な方法と捉えている。

すなわち、異学年で組織された学習集団は、多様な個性をもち、個人差が大きいのが特徴である。そのような集団の特徴を生かし、リーダーシップやメンバーシップを機能させるように学習を組織し実践すれば、それによって、自分の能力や興味・関心に応じた種目選択の楽しさを味わい、継続できる能力の育成が図れるという仮説のもとに実践がなされている。[5)6)7)] このように、最近、選択制に関わる男女共習の授業が展開されているが[6)7)]、特に異学年集団によるたて割りの学習形態についての実践的研究はほとんど見あたらない。このような意味で本研究の意義があると考える。

本研究は、琉球大学教育学部附属中学校を対象にし、中学校体育の運動領域より、特に種目選択を念頭に置き、体操領域を除く6領域に的をしぼり、選択制、男女共習、たて割り学習に対する生徒の反応を調査し、性別、学年別の分析により、その特徴を明らかにしようとするものである。

尚、附属中学校を対象にした理由は、選択制

*　琉球大学教育学部（保健体育科）
**　琉球大学教育学部（附属中学校）

などが精力的に実施されており、生徒がそれぞれの概念についてよく理解していると考えたからである。また、本研究は小橋川の研究[1),2)]と連動するものである。

方　法

1．調査の対象：琉球大学教育学部附属中学校
　　456名　1年　151名　2年
　　155名　3年　150名
2．調査期日　1993年2月18日－19日
3．調査方法　学級別の集合調査
4．質問紙
　各領域に対する選択制、男女共習、たて割り学習の一般的反応を見るために、次のような質問を設定した。
　〈設問〉各領域の選択制や男女共習、2学年・3学年たて割り学習のそれぞれについて、実施することについて答えて下さい。（答え方　1．賛成　2．どちらともいえない　3．反対）
　尚、3学年が合併した異学年集団の学習形態を、本研究では、たて割り学習と呼ぶことにする。
5．結果の処理
　統計ソフト、マルチ統計（社会情報社）により、X^2検定、因子分析により処理した。

結果と考察

1．各領域に対する選択制、男女共習、たて割り学習に対する生徒の反応

本研究は、中学校体育の6領域（体操を除く）について、選択制、男女共習、たて割り学習を実施することに対する生徒の反応を調査・分析することであった。生徒のそれぞれの反応の背後には、生徒の過去経験も重要な要因になっていると考えられる。表1．には、調査対象者がそれぞれの領域に対し、どのような経験をしたかを示してある。考察に当たっては、表1．も参考にし進めたい。

表1．◎領域における学習形態の履修状況

領　域	学　年	たて割り学習	男女共習	選 択 制	備　　考
球　技	1年	○	○	○	・バレーボール、ハンドボール、サッカー、バスケットボールから選択。
	2年	○	○	○	
	3年	○	○	○	
陸上競技	1年	×	○	×	・1年は単一学級、一斉授業で実施、 ・2．3年は、短距離走．中距離走．走り幅跳び．走り高跳び．砲丸投げ．ハードル走から選択。
	2年	○	○	○	
	3年	○	○	○	
水　泳	1年	×	×	×	・各領域、大単元実施の関係から1年での実施ができず2、3年のみの履修。
	2年	×	○	○	
	3年	×	○	○	
器械運動	1年	○	○	○	・器械運動・武道（剣道）との選択とし、1．2年の間に必ず器械運動を履修すること、3年では実施しない。
	2年	○	○	○	
	3年	×	×	×	
武　道（剣　道）	1年	○	○	○	
	2年	○	○	○	
	3年	×	×	×	
ダ ン ス	1年	×	○	×	・1年創作ダンス、2年フォークダンス、リズムダンス、3年は創作ダンス、フォークダンス、リズムダンス、郷土の踊りから選択。
	2年	×	○	×	
	3年	×	○	○	

［○履修　　×未履修］

1）選択制について

図1～6は6運動領域の選択制に対する生徒の反応を学年別、性別に示したものである。特に、これらの図より各運動領域における1．2．3年生の賛成率上限～下限をあげ、各運動領域の選択制に対する意志表示の目安にする。

球技の選択制に対する賛成率は男子91～80％、女子93～88％の範囲にあり、殆どの生徒が球技の選択制を支持している傾向が伺われる。球技の選択制に対する反応は X^2 検定の結果、性差も学年差も見られず、男女の反応も殆ど同じ傾向を示しており、球技の選択制に満足している傾向が伺われた。陸上競技の賛成率の反応も男子75～68％、女子83～70％の範囲にあり、球技に次ぐ賛成率の高い領域と言える。男女の比較では1年生に性差（X^2=6.05、df＝2）が見られ、女子に好意的傾向が伺われた。学年比較では男子の学年間に変化はないが、女子には学年差（X^2=10.22、df＝4）があり、学年が進につれて賛成率の下降現象が見られた。器械運動の賛成率は男子62～53％、女子74～63％の範囲にある。器械運動の選択制についての賛成率は学年差はなく、男女ともに過半数を占めている。しかし、2年生には5％水準で性差があり（X^2=7.79、df＝2）、女子に高い傾向が見られた。

球技、陸上競技、器械運動の選択制による賛成率はすべて過半数を占めており、選択制に対して好意的意志表示と受け止められる。

武道、水泳においても学年差、性差は認められていないが、その反応の仕方は前述の3領域とは異なっている。武道の選択制に対する賛成率は男子35％～30％、女子62～48％の範囲、水泳は男子51～48％、女子59～54％の範囲にそれぞれ位置づいている。ダンスに対する反応も男子59～37％、女子64～43％の範囲で、水泳、武道とほぼ同じ傾向を示している。しかし、ダンスは0.1％水準で性差があり（X^2=10.70、df＝2）、学年比較では男子5％水準で学年差がみられた（X^2=10.31、df＝4）。すなわち、1年生においては、男女間の差があるものの学年が進むにつれてその傾向は見られない。男子の学間の比較では、学年が進につれてダンスの選択

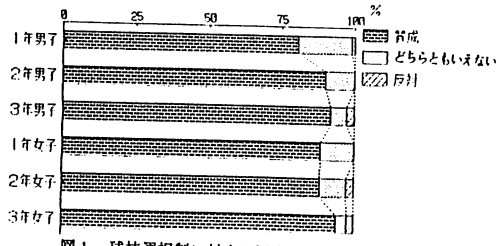

図1．球技選択制に対する反応

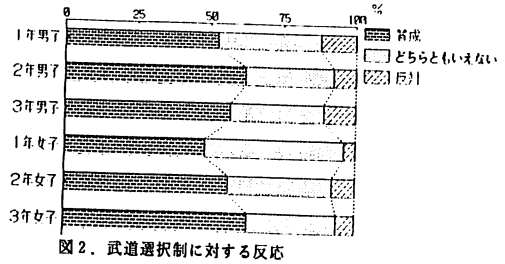

図2．武道選択制に対する反応

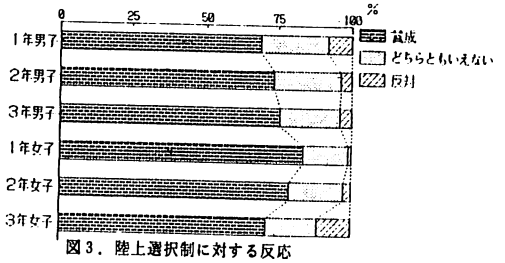

図3．陸上選択制に対する反応

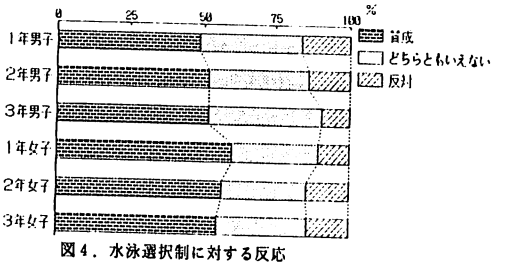

図4．水泳選択制に対する反応

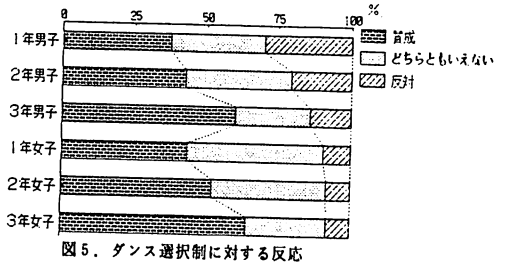

図5．ダンス選択制に対する反応

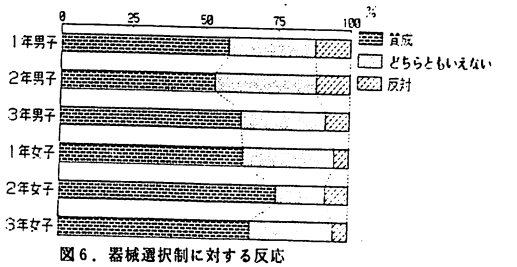

図6．器械選択制に対する反応

制に賛同者が増加する傾向が伺われるが、女子には学年間の変化は見られなかった。

以上、6運動領域の選択制について検討したが、特徴としてあげられることは球技、陸上競技、器械運動の種目選択については、中学生の意識は好意的で明確に意志表示が見られる。一方、武道、水泳、については賛成と他の回答が半々、または賛成を上回り、選択制に対する意識が不明確等の傾向が伺われた。

次に6運動領域について因子分析（主因子法、バリマックス回転）を男女別に行った結果、2因子を抽出した。因子負荷量を0.4以上で見ると、男子は単独因子として、第1因子に武道、水泳、ダンス、器械、第2因子に球技、また、両因子にまたがる中間的因子として陸上が抽出された（累積寄与率62.0%）。一方女子は、第1因子として武道、陸上、水泳、ダンス、器械、第2因子は球技が抽出された（累積寄与率62.4%）。この結果は、球技のみ男女に共通して第2因子に単独因子として抽出されており、男女が球技に対して非常に好意的であることを示している。

2）男女共習について

図7より図12にかけては、6運動領域の男女共習に対する生徒の反応を示している。球技の男女共習についての賛成率は男子44〜36%、女子84〜58%の範囲にあり、男女共習の賛成率は男子が半数以下、女子は半数以上の傾向を示している。男女間の比較では女子の1年生に5%水準で（X^2=8.86、df=2）、2・3年生に1%水準でそれぞれ差があり（2年生X^2=14.06、3年生X^2=26.71、df=2）全ての学年で女子は高い傾向がみられ、男子よりも好意的に受け止めている。学年比較では男子は学年間に変化はないが、女子には0.1水準で学年差がみられた。（X^2=17.02、df=4）。即ち、学年が進むにつれて男女の差が広がり、学年が進につれて女子の賛成率が着実に伸びているのが特徴と言えよう。

球技は1989年より男女共習授業が継続的に実施されており、その効果がこのような結果に

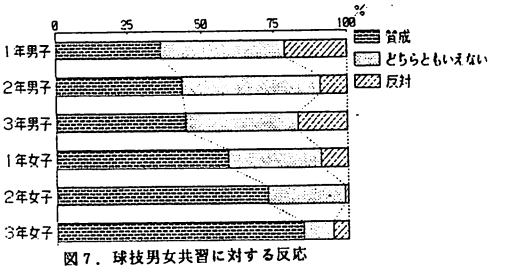

図7．球技男女共習に対する反応

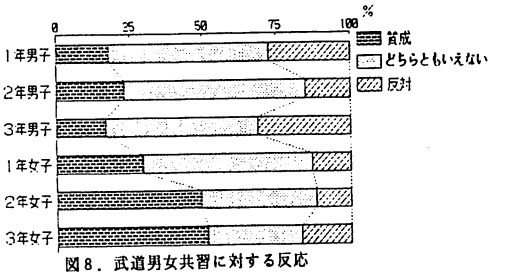

図8．武道男女共習に対する反応

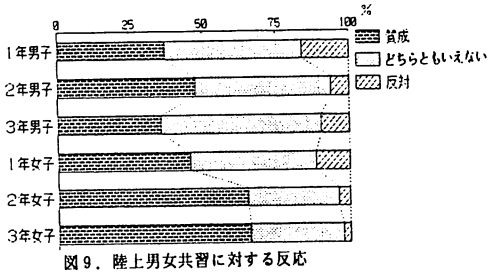

図9．陸上男女共習に対する反応

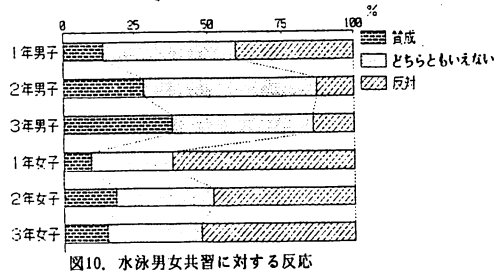

図10．水泳男女共習に対する反応

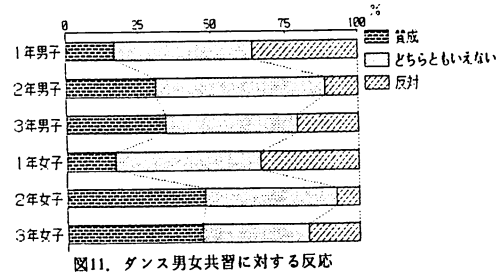

図11．ダンス男女共習に対する反応

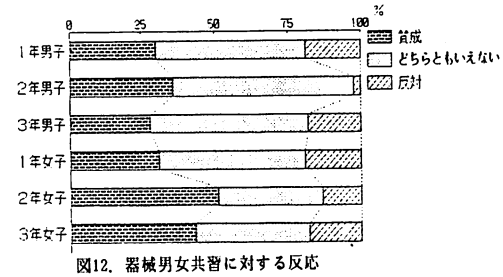

図12．器械男女共習に対する反応

反映されているものと考える。このことは、本研究と同じ学校を対象に因子分析を用いた小橋川らの研究において、男子は横ばい状態であるのに対し、女子のみ男女共習に対し好意的に変化していたことと符号する。特に質問項目の「男女共習では、技術体力が伸びる」が男女の差の最も大きい項目であり、男子の技術・体力要因をいかに克服するかが重要であるとしている。

陸上競技に対する反応は、男子47〜35%、女子65〜45%の範囲で賛成率でやはり女子に高い傾向を示している。男女比較では3年生に0.1%水準で差（X^2＝14.05、df＝2）があり、女子の方に高い傾向が伺われた。学年間の比較では、女子には5%水準で学年差が伺われる（X^2＝11.48、df＝4）。即ち、1年生と2．3年生の間に有意差があり、2．3年生に賛成率が増える傾向にあることを示している。賛成率は球技ほど高くないが、変化傾向は類似している。

器械運動、武道、ダンスの男女共習に対する反応は前述の2領域に比べて賛成率はかなり低下する傾向にある。器械運動は、男子35〜28%、女子50〜31%の範囲を示し、男女とも賛成率は半数を割っている。男女間では2年生に0.1%水準で有意差（X^2＝12.97、df＝2）があり、女子に高い傾向があった。学年比較では、男子に5%水準で学年差が見られたが（X^2＝11.81、df＝4）、女子には学年差はない。武道の男女共習に対する賛成率は男子23〜18%、女子51〜29%の範囲にあり、2、3年生に0.1%水準で性差が見られた（2年生X^2＝11.63、3年生X^2＝18.79、df＝2）。学年比較では、男子に変化はないが、女子に5%水準で学年差が伺われた（X^2＝12.16、df＝4）。即ち、1年生では男女差はないが、2、3年生の女子に賛成率が増える傾向を示している。表1．に見られるように武道は器械運動との選択制であり、女子の武道の体験者は非常に少なく、女子の傾向は実質の体験に基づくものではない。ダンスの男女共習に対する反応は、男子34〜16%、女子47〜16%の賛成率に見られる。各学年とも男女間に変化はないが、学年比較では男女とも0.1%水準で差が見られた（男子X^2＝15.81、女子X^2＝26.72、df＝4）。即ち、男女とも1年生に比べると、2．3年生には賛成率が伸び、男女共習に対する賛成の意志表示も次第に明確になっている。ちなみに、附属中学校では1年生に創作ダンスの男女共習を実施、2．3年も同じ学習形態で種々のダンスを経験している。

ダンスの男女共習がスムーズに導入できれば、非常に有効な学習形態だと思われる。実際に男女共習によるダンスの実践的研究が実施され、効果をあげている実践データもある。[3)4)]

八代[8)]も男女共習の学習形態はダンスに効果的と指摘している。創作ダンス、フォークダンス、郷土のおどり（男女打組踊り）等は男女が共に学ぶことが本来の姿であり、男女共習学習がダンスの特性を生かし得る有効な学習形態と思われる。しかしながら、ダンスの歴史的、社会的環境からくる男子の心理的抵抗感をどのように取り除くかが今後の課題であろう。

水泳の男女共習に対する賛成率は他領域に比べかなり低く、男子38〜14%、女子18〜10%の範囲である。賛成の出現率は6運動領域の中で最も低く、女子は1割に過ぎない。ちなみに、反対意見の出現率をあげると、男子は40〜12、女子89〜48%の範囲にあり、特に、女子は男女共習に反対を表明している傾向が伺われる。男女間では2、3年生で0.1%水準で性差が見られ（2年生X^2＝22.63、3年生X^2＝24.94、df＝2）、男子に高い傾向が見られる。学年間の比較では、女子に差がみられないが、男子に0.1%水準で学年差が見られた（X^2＝24.65、df＝4）。即ち、男子は学年が進むにつれて賛成者が増える傾向を示すが、女子は変化せず、反対意見が多いのが特徴である。このことは、女子が水着姿になって共習することに対する抵抗があると考えられ、中学校期の心理的特徴をよく示しているものと解することができよう。

以上6領域の男女共習学習に対する男女の意識の特徴は、女子が球技、陸上競技の男女共習に対して男子より高い反応を示し、それも学年が進につれて伸びる傾向にあり、男子より好意

的傾向を示している。男子は球技、陸上競技ともに学年間の変化が見られなかった。しかし、ダンス、器械運動、武道、に対する男女共習学習の反応は、女子では3領域とも類似している。すなわち、1年生女子はどちらでもないの反応が高いのに対して2．3年生では賛成に傾き、50%前後を占めるようになる。水泳の男女共習に対しては、全女子が強く反対している。一方、男子の水泳に対する意識は学年が進につれて反対意見が減少し、女子ほどの抵抗感が見られない。

6運動領域の因子分析の結果、男子の方は2因子が抽出され、因子負荷量を0.4%以上で見ると、第1因子に競技と陸上、第2因子として武道、水泳、両因子にまたがる中間的因子としてダンス、器械運動が抽出された（累積寄与率64.1%）。一方女子は、第1因子に球技、武道、陸上競技、第2因子に水泳、両因子にまたがる中間的因子としてダンス、器械運動が抽出された（累積寄与率63.4%）。男女共習では女子の水泳が第2因子に単独で抽出されている。

男女共習の学習態形に対する意識の特徴は女子が男子に比べて、好意的であり、それも学年が進につれてこの傾向が強い。しかし、水泳に対しては男子より賛成率が低く、逆に反対率が高い傾向を示している。男女共習の学習形態は運動の特性と学習者の心理状況を判断し、有効に導入することが肝要であろう。

3）たて割り学習について

図13から図18にかけては、6運動領域のたて割り学習に対する生徒の反応を示している。球技のたて割り学習に対する男子の賛成率は69～78%、女子70～88%の範囲にあり、非常に好意的に受け止めている。男女間の比較では、3年生に5%水準で性差があり、（X^2=8.49、df=2、3男子69.4%、3女子88.5%が賛成）女子に高い出現率がみられた。学年比較では、女子に5%水準で学年差が認められた（X^2=11.48、df=4、1年女子70.1%、3年女子88.5%が賛成）。このことは、女子が高学年になるにつれて好意的な方向に変化することも示している。

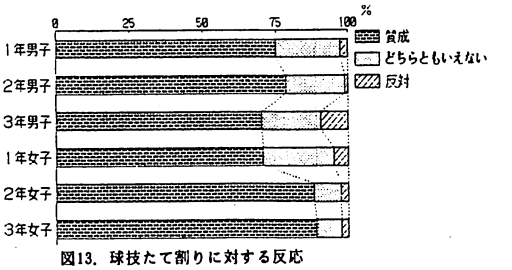

図13．球技たて割りに対する反応

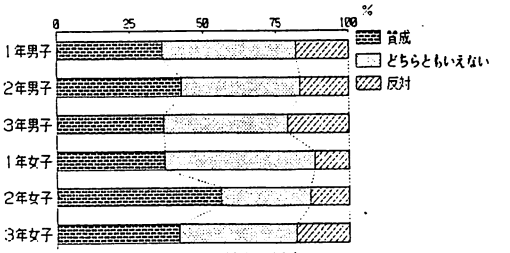

図14．武道たて割りに対する反応

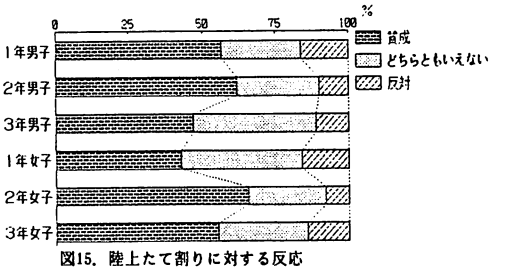

図15．陸上たて割りに対する反応

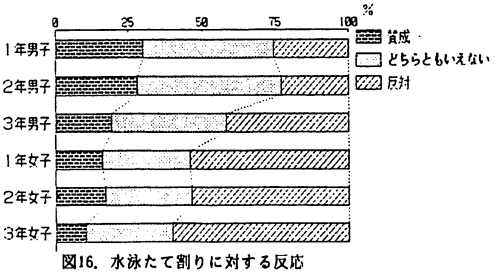

図16．水泳たて割りに対する反応

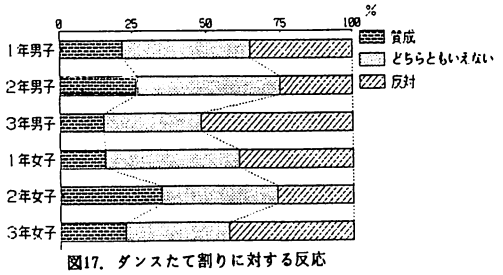

図17．ダンスたて割りに対する反応

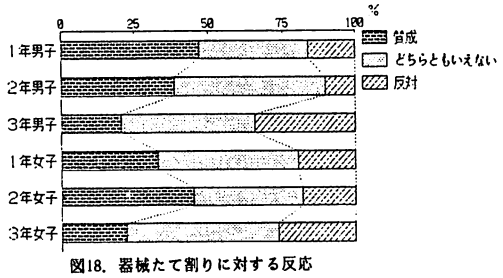

図18．器械たて割りに対する反応

陸上競技と武道のたて割り学習の反応では、まず、陸上競技の賛成率が男子46〜61%、女子42〜65%の範囲にあるのに対して、武道の反応はやや低く、男子36〜42%、女子36〜56%、女子36〜56%の範囲にあった。両領域とも2年生にやや高めの反応が示されているが、統計的に学年差、性差は認められなかった。陸上運動の賛成率は過半数を越えていることから、たて割り学習に対して好意的に受け止めていると言えよう。しかし、武道に対しては賛成よりも、どちらでもないと反対の意見の方が多く、意志表示は好意的でない。

器械運動のたて割り学習の賛成率は男子20〜46%、女子27〜39%の範囲にある。各学年とも男女間の差は見られないが、学年間の比較では、男子に0.1%水準、女子に5%水準で学年差が見られた（男子X^2=20.69、女子X^2=9.59、df=4）。男女とも3年生になると賛成率が減少し、逆に、反対率が増加する特徴が伺われた。ちなみに3年生の反対率は男女とも40%を越えている。

水泳とダンスのたて割り学習に対する賛成率の反応では、まず、水泳の賛成率は男子19〜30%、女子、10〜17%であった。男女間の比較では、1，2年生に0.1%水準で差があり、男子に高い傾向が伺われる（1年X^2=12.23、2年X^2=14.87、df=2）。しかし、学年差は男女共見られなかった。水泳は他の領域と比較して、最も賛成率が低いのが特徴である。男女とも賛成率は前述のように低く、逆に反対率は平均男子30%、女子55%である。特に、女子の反対者が多く、水泳のたて割り学習に対しては拒否反応を示している。ダンスの賛成率は男子15〜26%、女子15〜34%の範囲にある。ダンスは各学年とも性差は認められなかったが、学年間の比較では男女とも5%水準で学年差が認められた（男子X^2= 10.95、女子X^2=9.61、df=4）。男女とも2年生で賛成者が増加し、3年生で低下するのが特徴である。

水泳とダンスのたて割り学習に対する結果で注目されるのは、男女に共通して賛成者が非常に少なく、特に3年生にその傾向が強く表れることである。

6運動領域の因子分析の結果は2因子が抽出され、男子の第1因子に球技、武道、陸上競技が、第2因子に水泳、ダンス、器械運動が抽出された。一方女子は、第1因子に球技、陸上が第2因子に水泳、ダンスが、両因子にまたがる中間的因子として武道および器械運動が抽出された。

以上、6運動領域のたて割り学習について検討したが、特徴としてあげられるのは殆どの運動領域において3年生の賛成率が低いことである。この原因は、上級生の責任ある立場による反応なのか、非常に興味のある問題提起である。さらに原因追求を深めていきたい。

今回の調査から、6領域における選択制、男女共習、たて割り学習に対する生徒の反応の違いを明らかにすることができた。しかしながら、その背後にある理由については明らかにしていない。今後は、違いの理由や原因などについて追求していきたい。その理由が明瞭になれば、種目によって、どのような学習形態を構成することが望ましいか、その手がかりを提供することができよう。

まとめ

本研究は中学生を対象にし、体育における選択制、男女共習、たて割り学習を実施することに対する反応を調査し、性別、学年別意識の違いを明らかにすることであった。主たる結果は下記の通りであった。

① 選択制について

6運動領域の選択制に対する中学生の反応では、球技が最も高率で90%を占めている。選択制に対して、性差、学年差もなく、かなり好意的である。一方、賛成率の低い水泳、武道、ダンスにおいても50%前後の賛成率が見られた。

② 男女共習について

6運動領域対する男女共習の反応では、女子が水泳を除く5種目に男子より高い賛成率を示し、学年が進につれて好意的傾向

が伺われた。一方、水泳に対しては反対率が高く、水泳の男女共習に抵抗を示している傾向が伺われた。男女共習は運動の特性を考慮する必要があろう。

③　たて割り学習について

6運動領域のたて割り学習の反応では、球技が最も高率で性差、学年差もなく、非常に好意的である。しかしながら、他の5運動領域は、学年が進につれて賛成率の下降現象が伺われた。その最も特徴的なのは、水泳に対する反応である。

今回の調査から、6領域における選択制、男女共習、たて割り学習に対する生徒の反応の違いを明らかにすることができた。しかしながら、その背後にある理由については明らかにしていない。今後は反応の違いや原因を追求していきたい。このことが明確になれば、どのような学習形態を構成することが望ましいか、その手がかりを提供できよう。

引用・参考文献

1）小橋川久光、上地幸市：たて割り・男女共習授業に対する中学生の意識に関する研究（球技の種目選択生を中心に）、琉球大学教育学部紀要第42集第2部、p.199－208、1993.

2）小橋川久光：中学生の運動学習に対する意識の経年的変化に関する研究（球技の選択制を中心に）、琉球大学教育学部紀要43集第2部、1993.

3）玉城昭子・上原廣子「中学男女による創作ダンスの実践的研究」教科教育学研究第11集、pp157－177、1993

4）東原乙女・川口千代・仲村なおみ「男女共修によるダンス授業に関する研究」筑波大学体育科紀要14、85－97、1991

5）上地幸市、上原廣子、呉屋政隆：一人ひとりが運動の特性を自ら味わう学習指導の工夫（3学年たて割りによる球技の選択制授業を中心に）、琉球大学教育学部附属中学校研究紀要、第3集、p. 165－89、1989.

6）上地幸市、上原廣子、下地政彦：一人ひとりが運動の特性を自ら味わう学習指導の工夫（3学年たて割りによる琉球の選択授業を中心に）、琉球大学教育学部附属中学校研究紀要　第3集、p169－194、1990.

7）上地幸市、上原廣子、西川賢：一人ひとりが運動の特性を自ら味わう学習指導の工夫（3学年たて割りによる球技の選択制授業を中心に）、琉球大学教育学部附属中学校研究紀要、第4集、p127－151、1991.

8）八代勉　体育科教育法講義　大修館書店　p. 200、1992